

聖家族の祝日

金 大烈 神父

2007年12月30日(日)

《私達は神に選ばれた聖家族》

クリスマスからの一週間、忙しくも意味のある時間を過ごしました。さあ、きょうは三つのことについて話をしようと思います。

まずは“聖家族” ことについてです。聖家族というのはどの家族を言うことでしたか。そう、ヨゼフ様、マリア様、そしてイエス様の家族ですよね。3人の家族の共通点は何でしょうか。皆、私達に、ものすごく尊敬されながらも、実際の彼等の人生は最後まで苦労ばかりでした。しかし私達はその3人を聖家族として尊敬し、私達もその様な家族になりたいと願っています。

今日、聖家族の日を迎えて皆様に話したいことは、まず「自分が死んだ時泣いてくれる人に最善をつくして下さい」ということです。本当に大事にして下さい。

今のこの時代は、必要な“権威” さえ失ってしまった様に感じます。父親が父親として、夫が夫としての権威を失ってから長い時間がたち、また教師も子供達に職業的とさえ感じられる様になってしまいました。

第一に“父親” を大切にして下さい。大事にして下さい。これは変わらない真理です。どの家庭でも父親が自分の位置にきちんと立たなければ、どんな家庭でもその家庭は崩れます。父親をその位置に置くのは母親であり妻である女性の努めです。子供にその様に教えるのも母親の役目です。それをしなかったらどんな家庭でも、子供達が第一の“被害者” になり、そしてもっとひどく母親にあたる様になります。ご婦人達にお願いがあります。父親、ご主人に対して本当に心を込めて最善を尽くして下さい。

第二は子供の先生はやはりお母さんです。自分の妻、子供達のお母さんの“権威” を認めて下さい。母親、妻は何か“影” の様な存在です。妻が“家族の者が疲れた時の心の休まる場所” その様な役割を果たすためには、ご主人がその環境を作ってあげなければなりません。その様なことが出来れば子供たちはたくましく、元気に育ちます。よく振り返ってみて下さい。私は子供達の前でその父親を責めたことはなかったか。私は子供達の前で自分の妻をしかったことはなかったか、よく考えてみて下さい。多分あるでしょう。しかしそれは責められた相手の被害ではなく、それを見ていた子供達の傷になります。それを意識しましょう。大事なことです。そしてその子供達が繰り返して同じことをしない様に、正しい生き方をする様に父親・母親は目上の者としてそれを大事にしなければなりませんと思います。

さあ、少し信仰的な話をしましょう。“聖家族” というとそれは全家族が信者である家庭をいいます。今ここにいらっしゃる皆様方の中には、ご自分だけが信仰の生活をなさる方もいらっしゃるでしょう。しかし教会が求める模範的な聖家族になるために私達は頑張らなければならない。時には私達は錯覚していることもあります。「私は一生懸命信仰の生活をしています」「家族の他の者はイエス様には出会わなかったけれど私はその家族のために祈っています」それは正しいことです。しかしそこには錯覚が一つあります。その様な考え方は何か利己主義的、わがままな信仰であると思います。よく考えて見て下さい。自分が“これは宝物” “一番大切なもの” と思ったものを一番愛する人に、一番身近な人に何故、力を尽くして伝えないのでしょうか。これは教会が皆様に願っていることです。ご自分の信仰が確信に満ち、誇れるものであるなら家族のために最善を尽くして下さい。それは必ずのちに神様に聞かれます。私達の持っている信仰は自分達だけのものでは絶対ありません。今日聖家族の日を迎えて、ご主人、奥さん、子供達の顔を思い出して下さい。そしてこのミサを、自分を忘れてその人達のために捧げましょう。

さあ、2番目、第2朗読に《皆さん、あなた方は神に選ばれ聖なる者とされているのですから哀れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい》とあります。これも私達が錯覚する一つです。日本の教会の信者は“誰かに誘われて”ではなく“自分の意志で”教会に来た人の方が多いです。自分が教会、信仰に興味を持ち教会を訪ね、そして洗礼を受ける方がほとんどです。渋川の教会では70%でした。この様なことは「自分も誘われなかったから、人を誘うのが苦手」という意識を持ちます。そういう雰囲気の中で私達は錯覚してしまうのは、「私がイエス様を選んだ」、「私が洗礼を希望した」と思ってしまうこと。いいえ、とんでもないことです。今日、使徒パウロによって話された様に「神様が私達を選ばれました」、「私が選んだ」ではありません。私達に与えられた資格は「はい」「いいえ」と答えることだけです。こういうことを私達が忘れてしまうと私達は積極的になれません。本物の神様の愛を感じられません。私達は呼びかけられて、ただ答えるだけです。「はい従います」「いいえ従いません」とかその決断をするのが私達です。呼びかけるのは神様です。それを意識して下さい。信仰の生活すべては神様の呼びかけです。その呼びかけに私はどの様な答えを出すのか、私は応じているのか、それを振り返りながら前に進んで行くのが信仰の生活だと思えます。

さあ、3番目のお話ですが、昨日お葬式のミサがありました。亡くなられた方は私が全く知らない、一面識もない人でした。ずっと前に洗礼を受けられましたが、ご病気のためにこの1年以上は寝たきりの状態で教会に来られるのが困難でした。事情を考慮し、お葬式のミサを授けましたが、その時皆様に必ず伝えようと思ったことがあります。「死ぬまで顔を見せて下さい」「死ぬ前には是非顔を見せて下さい」「ご家族は私に『来て下さい』と要求して下さい」。悲しかったです。説教しようとしても彼について何も知らない、何を話すべきか分からない。

今日聖家族の日、広い意味で私達は本当の家族です。“兄弟姉妹”とは口だけでしょうか。隣に座る人を“私の兄弟”と思っているのでしょうか。私は皆様の神父です。教会の家族の中で“父親”かも知れません。本当にもどかしい心でした。

私達は皆兄弟姉妹であり家族であるということは、今ここにいる人にも責任を感じなければなりません。どなたかが秘蹟を受けることが困難であれば、周りの私達が力を尽くさなければなりません。私達が動かなければなりません。何かの不便さのためになかなか教会に来られない人もいます。その様な人に私を会わせて下さい。必要なことです。教会を離れてお葬式だけを頼まれても受けられません。私は自分の家族を守ります。葬式ミサは他で行う様な儀式的なものではありません、軽いものではありません。葬儀は神様のもとに帰られる人のために、全信者、全共同体が心を込めて捧げるミサです。ただ儀式的に行うことは死んだ方への礼儀にも反します。私はこの私の家族のためにミサを捧げます。お金や習慣、文化的な理由で行うものではありません。信者である場合は通夜もミサを捧げます。しかし信者でなかったり、永い間教会を離れている方にはミサを授けられません。また未信者同士の結婚式もお断りします。

さあ、「聖家族」の日、もう一度家族の大事さを考えながらこのミサを捧げましょう。

ありがとうございました。